

兵庫県医師会医療支援チーム（第20陣）「宮城県災害支援現地報告」

兵庫県医師会議長 藤原 克昌

天災は忘れたころにやって来るのではなかったのか？

今回は、阪神・淡路の大震災を忘れる前にやってきた。

前回の被害の記録と記憶を基準に行政も個人も防災計画を進めてきたはずであるし、TVを中心とするメディアの報道にも「阪神・淡路」と対比した分析が多い。決して忘れてはいないのである。その意味では想定外で前者を超えた震災なのである。

4枚のプレート群のエネルギーのせめぎあいの僅かの時間の均衡の上に横たわる列島に生きていながら我々はこの16年に有効な対策を講じてこなかった証が今目の前にある。しかも文明の進歩に相俟って人災を伴い2重、3重の被害をもたらしている。インタバルを早め、強度を増し、複合化しているのは人類の飽くなきエネルギー源の追求、天然資源の乱費と無関係ではないように思える。一瞬にして大都市が瓦礫化し、昨日まで先進医療の中で働いていた医療者たちが今日は野戦病院で働いている。文明の歪の是正が政治のレベルでprospectiveに求められる。ここに立てば誰しもそう思うであろう。

宮城県支援の最後の日の午前中は石巻中学の拠点診療所で診察した。20歳代の女性が同年代の男性に付き添われて受診した。ナースが、毎日来るパニック症候群の患者だと教えてくれた。不安と倦怠感を訴え前回処方薬数日分を一日で飲んだが眠れないという。未だ血痕生々しいリストカットの数条を認めた。診察室の隣で時間をかけて昼前までナースが話しかけていたが、やっと診察室に来てくれた。しかし専門家でない私に出来ることは何もない。

「ここは兵庫県の救護診療所で、私も含めてここに働いている人達は、眠りかけていた16年前の悲しみの記憶を揺り起こされて石巻に来た。あなたがなんとか今を乗り越えれば、その体験が将来多くの人々を救うことになるだろう。」と話した。最後は笑顔で有難うございましたと言って二人で帰って行った。明日はどうなんだろうと思いつつここでの最後の仕事を終えた。